

IPランドスケープで「つなげる」「つながる」 ー IP ランドスケープ推進協議会の取り組み紹介ー

Connecting and Engaging in the IP Landscape



住友化学株式会社 知的財産部 部長
IP ランドスケープ推進協議会代表幹事

後藤 文郷

1992 年住友化学株式会社に入社。材料分析、計算機科学、触媒開発、表示材開発等の研究開発に従事し、4つの研究グループにてグループマネージャーを歴任。2023 年 10 月に知的財産部に異動し、知的財産部長に就任。2024 年度より IP ランドスケープ推進協議会代表幹事。



ナブテスコ株式会社 技術本部 知財戦略部長 兼 イノベーション戦略室
IP ランドスケープ推進協議会幹事

井上 博之

ナブテスコ株式会社に入社後、R & D部門に配属。知的財産部に異動後、2012 年から経営者や事業責任者の知財参謀として活動、2020 年知的財産部長、2023 年からイノベーション戦略室を兼務、2025 年に技術戦略部門を併合し知財戦略部として技術及び知財戦略ミックスに取り組む。



旭化成株式会社 知財インテリジェンス室 シニアフェロー
IP ランドスケープ推進協議会幹事

中村 栄

1985 年旭化成株式会社入社、研究所勤務の後、1989 年より知的財産部勤務。知財情報調査、解析の専門家として業務、2018 年 10 月より旭化成グループの知的財産部長、2022 年 4 月より現職。2020 年 4 月にシニアフェローに就任。2016 年度日本特許情報機構（Japio）特許情報普及活動功労者表彰 特許庁長官賞「特許情報人材育成功労者」受賞。経済産業省 産業構造審議会 知的財産分科会委員ほか。



株式会社ブリヂストン 知的財産部門部門長
IP ランドスケープ推進協議会幹事

荒木 充

ブリヂストン入社駆け出しから 20 年間はタイヤ設計に従事。欧米中で計 8 年の海外駐在を経験。タイヤ設計部長、開発企画管理部長、品質保証本部長を経て現職。IP ランドスケープ開発や事業貢献型の知財ミックス設計コンセプトを柱に、「モノ→コト→DX」で進化するソリューション事業に貢献できる知財機能変革に取り組む。



富士通株式会社 ビジネス法務・知財本部 知財グローバルヘッドオフィス長
IP ランドスケープ推進協議会代表幹事

和泉 恭子

企業研究所、特許事務所勤務の後、2008 年富士通株式会社に入社。特許権利化・ライセンス、知財事務管理、知財戦略の策定・推進などに携わり、2021 年より現職。知財部門の統括とともに、法務・知財の DX 活動をリード。2006 年弁理士登録、2020 年度より知的財産研究教育財団評議員、2024 年度より日本知的財産協会（JIPA）副理事長。

① はじめに～ IPL 推進協議会の 2024 年度の活動と 2025 年度の活動方針～

IP ランドスケープ（IPL）推進協議会は 2020 年 12 月、「企業の事業競争力の強化および知の探索による新たな価値創造の促進による企業価値の向上に加え、我が国の持続的な社会発展を促し、広く公益に寄与す

る」として、IPL を積極的に実施している国内企業 9 社、アカデミアとして金沢工業大学虎ノ門大学院の杉光一成教授が発起人となってスタートし、その活動は現在 5 年目に入った。会員は主に日本の事業会社で構成されるが、その数は 2025 年 7 月現在 118 社に達し、成長途上の協議会である。それぞれの活動も本格化してきて

おり、活動内容については様々な場でこれまでも紹介させて頂いてきた^{[1][2][3][4][5][6][7][8][9][10][11][12][13][14]}。IPL は知財情報を含む公開情報を解析し、可視化して有用な情報として与える便利なツールであるが、単なるツールにとどまらず、人と人、組織と組織、事業と事業、分野と分野など多様な関係を様々なレベルで繋ぐことでコミュニケーションを円滑にし、新たな価値を生み出す可能性を持ち、更には産業界を繋ぐ共通言語にもなり得ると考えている。

IPL をどう実践するかは各企業の興味を中心であるが、実践する方法論を参加各社の相互研鑽で体得する場として、2022 年度に仮想 IPL 分科会を設置し、年々活動をブラッシュアップしてきている。特徴的な本活動は、本協議会の目玉とも言える。更に 2023 年度には IPL の社会実装をグローバルに拡げていくことを目的とした海外連携分科会と、仮想 IPL 分科会活動の成果から IPL 活動の共通項を見出し標準化することを目的とした IPL 標準化分科会を新たに設置し、3 分科会体制とした（図 1）。2024 年度は、いずれの分科会も活動をより深く前進させることができた。

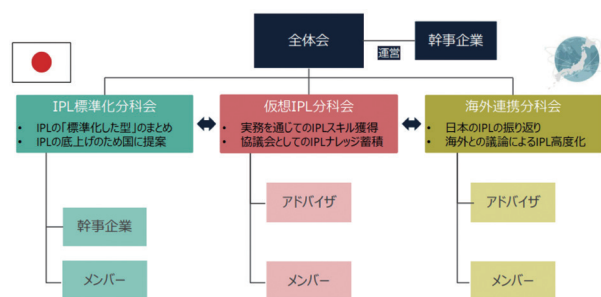


図 1 IP ランドスケープ推進協議会の体制

日本の産業界を盛り上げるため IPL 普及による各社連携の拡大を目指すという思いから、引き続き会員企業の増加を図っていくが、一方で会員数増加に伴う意識やレベルの幅が拡大しているという現実も顕在化してきている。Give & Take の精神を前提とした本会だが、会員企業が増えたことにより Give する企業と Take する企業に分かれつつあるという課題も見えてきた。Give & Take の精神を再度意識し合うことも必要と考えている。

これらの問題意識も踏まえ、2025 年度の活動方針案を、「3つの分科会を中心に活動の深化と裾野拡大の双方を推進する」、「産業界の連携拡大や会員数増のための更なる情報発信に取り組む」とした。先進企業向けだ

けでなく、裾野を広げる、底上げを図る活動を進めつつ、会員企業の Give の機会を増やす取組を進めていく。裾野拡大の具体例としては、仮想 IPL 分科会における入門編の設立、IPL 標準化分科会の初心者向けに焦点を絞ったガイダンスの可視化検討等を予定しており、会員企業の分科会への参加促進を図る。また、例えば海外連携分科会での気付きを仮想 IPL 分科会のテーマ設定に活かすなど、分科会間の連携の推進を図ることも狙いとしている。これらの取組を通じて本会の更なる発展につなげたいと考えている。

本誌では協議会のメインの活動である仮想 IPL 分科会、海外連携分科会および IPL 標準化分科会のそれぞれの活動について紹介する。

② 仮想 IPL 分科会について

仮想 IPL 分科会は、本協議会の中核的な活動の一つであり、会員企業から希望するメンバーが集い、実在企業の経営課題や事業戦略への提案を想定したテーマに対してチームで仮想的に IPL 活動を行う場である。この分科会の目的は、実践的な経験を通じて、メンバーの IPL に関するスキル向上と、参加メンバーが保有する暗黙知の共有を図ることにある。

仮想 IPL 分科会の特徴は、図 2 に示す通り、異なる企業からの参加メンバーが切磋琢磨し、相互研鑽を図る「他流試合」の場と、実在する企業の経営層等への提案を想定した IPL 活動を行う、単なる勉強レベルではない、「真剣勝負」の場であると形容される点にある。参加メンバーは、業種も異なる他企業のメンバーとチームを組み、互いの知見や経験を共有しながら、上記テーマに取り組む。このプロセスは、参加者にとって、自社の常識や考え方の枠を超えた、新たな視点や発想を得る貴重な機会となっている。

IPL活動は環境分析・仮説構築・提案・議論などある程度、一般化できる進め方があるものの、個人の熱意、胆力、観察力及び洞察力など **マインドや暗黙知のようなものがIPL 活動の成否を分ける**キーとなる。

書籍や研修、短期間の演習では会得できるものではなく、誰と一緒に IPL活動を行うかによっても会得できるものの質が大きく異なる。

- ①IPL活動へのマインドが高く、経験に基づく暗黙知があるメンバーが**切磋琢磨し、相互研鑽を図る、他流試合の場**
- ②実在する企業の経営層等への提案を想定したIPL 活動を行う、**単なる勉強レベルではない、真剣勝負の場**

①IPL手法・スキルの磨き上げ ②IPLの活用法 ③IPL組織構築・運用

図 2 仮想 IPL 分科会の狙い



(1) 2024 年度の仮想 IPL 分科会活動

2023 年度よりも効果的な活動にするために、3 点の改善を図った。一つ目がスケジュールの見直しであり、全体的に前倒してチーム内での検討時間の確保を図った。二つ目が自社を対象としたテーマ提案である。これまで秘密情報との関係から認めてこなかったが、会員からの要望もあり、チームに当事者が入らないことを条件に認めることとした。そして三つ目が最終報告会での報告方法であり、各テーマに関する提案と解析手法の説明を別に行うようにした。特に解析手法については、Web 会議ツールを活用して、説明者と参加者間でより具体的な質疑応答ができるようにした。

今年度は会員企業から 18 テーマの提案があり、そのうち事務局で厳選した 12 テーマについて会員企業へ参加募集を行った。その結果、村田製作所、ニコン、川崎重工業、キリンホールディングス、住友ベークライトに関する 5 テーマについて、6 チームに分かれて課題分析と提案を行うことになった。特に今年は、同じテーマ（キリンホールディングス）について 2 チームが分析を行うという、初の取り組みがなされた。

そして 2025 年 2 月に 2 日間にわたる最終報告会では、各チームから分析対象企業の経営層や R & D 責任者への提案を想定したプレゼンテーションと質疑応答が行われ、本協議会の幹事企業を含む会員企業からのフィードバックを受けた。解析手法についても様々な意見交換がなされた。紙面の都合から詳細は記載できないが、過年度の分析・提案資料や最終報告会の動画は会員限定で公開されているので、興味のある方は是非、本協議会に

参加頂きたい。

(2) チームリーダからのフィードバック

今年に行った 3 点の改善についてはチームリーダから評価を得たものの、各チームの人数が多かったことや、経験の浅いメンバーが比較的多かったチームではリーダの負担が過大であったことや、解析手法の質疑応答のやり方に課題があることが分かった。これらの課題については、次年度の活動で対応したい。

③ 海外連携分科会について

海外連携分科会は、昨年度も紹介の通り、海外の関連団体との連携を通じて、グローバルな視点から IPL の発展に貢献することを目的としている。この分科会の活動は、知財情報の戦略的活用という観点において、海外での活動を把握することにより、改めて日本の IPL 活動について見直しを行うことを狙いとする。具体的には、欧州の Patent Documentation Group (PDG)^[15] や韓国の Korean Intellectual Property Association (KINPA)^[16] などの団体と連携し、情報交換や共同研究を行っている。

海外企業との連携による知見の相互共有という観点において、海外の関連団体との定期的な会合やワークショップを企画、開催し、相互の知見や経験の共有を行っている。これにより、日本企業と海外企業の間で、IPL に関する理解が深まり、新たな協力関係が生まれることを期待する。

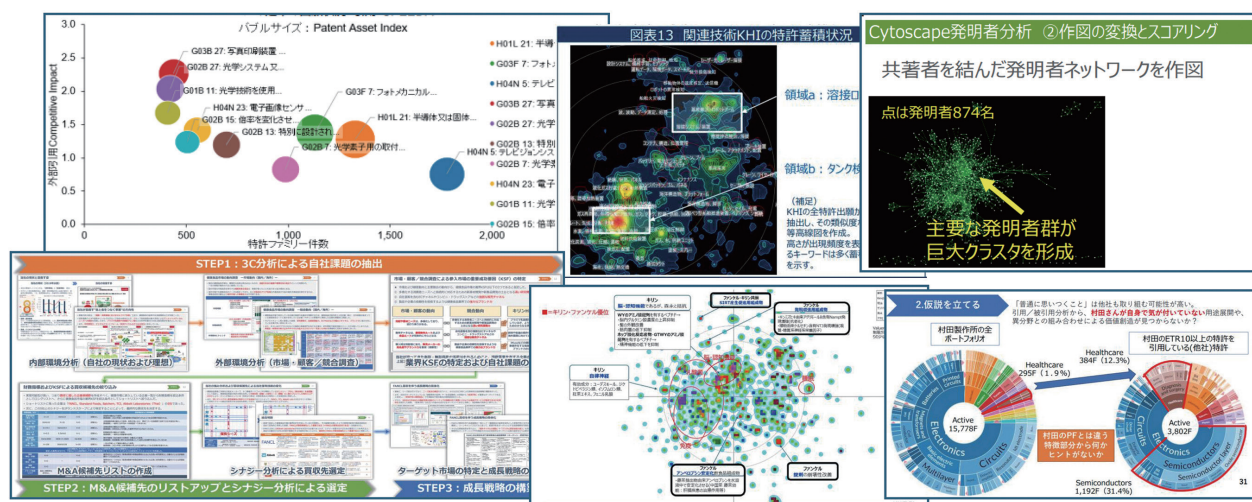
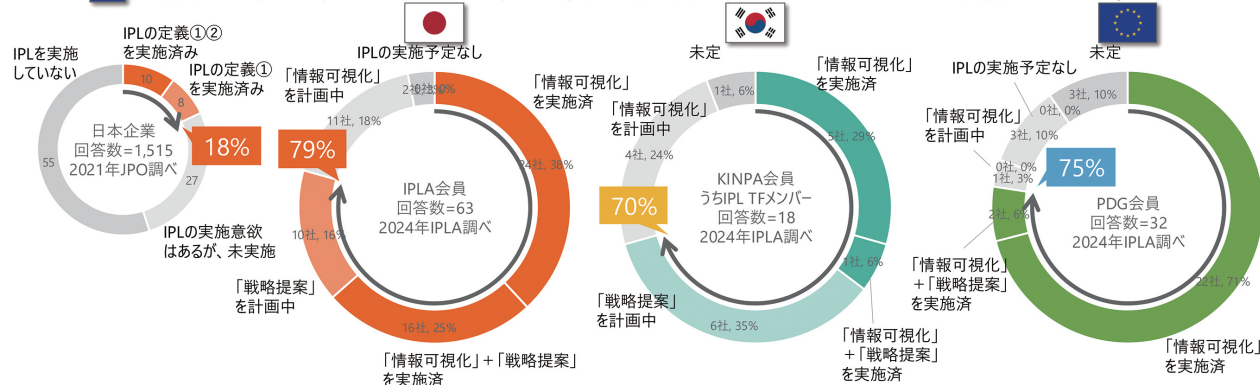


図 3 各チームのプレゼン資料抜粋

- 🇯🇵 2021年の調査^[1]ではIPLの実施企業はおよそ20%であったが、現在IPLA会員企業のおよ80%がIPLの実施に至っている。
- 🇰🇷 韓国におけるIPLは、KINPAのIPL TFメンバー企業が主導しているとみられ、同メンバーの70%がIPLの実施に至っている。
- 🇪🇺 欧州におけるIPLは、PDGのメンバー企業が主導しているとみられ、同メンバーの75%がIPLの実施に至っている。



【IPLの定義^[1]】 事業戦略または経営戦略の立案に際し、①事業・経営情報に知財情報を組み込んだ分析を実施し、その分析結果を、②事業責任者・経営者と共有すること

[1]経営戦略に資する知財情報分析・活用に関する調査研究（2021年・特許庁）

図4 IPLの実施状況（日・韓・欧の比較）

- 🇯🇵 IPL活動の受け手は、経営部門・事業部門・R&D部門など広範囲にわたる。IPLを通じた「情報可視化」は概ね目標を達成済み。一方、IPLを通じた「戦略提案」は目標と現状とのギャップが比較的大きい。
- 🇰🇷 IPL活動の受け手は、R&D部門などに比較的フォーカスしている。「情報可視化」を目標としている企業が多い。
- 🇪🇺 IPL活動の受け手は、R&D部門などに比較的フォーカスしている。「情報可視化」を目標としている企業が多い。

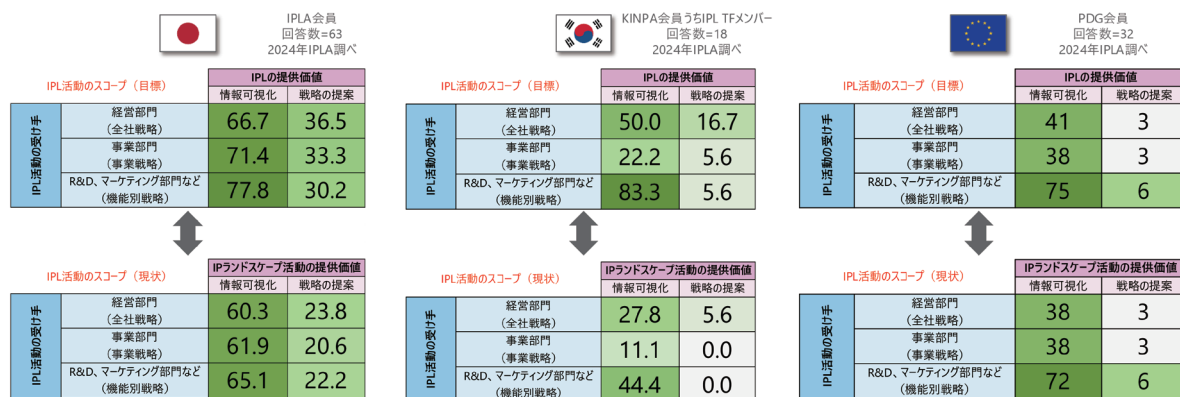


図5 IPL活動スコープの目標と現状（日・韓・欧の比較）

一連の活動に先立ち、当分科会では、日本、韓国、欧州の企業を対象に、IPLの実施状況に関するアンケート調査を会員向けに実施した。その結果、2021年の調査^[17]ではIPLの実施企業はおよそ20%であったが、現在は、日本のIPL推進協議会会員企業のおよ80%がIPLの実施に至っている。韓国におけるIPLは、KINPAのIPLタスクフォースメンバー企業が主導しているとみられ、同メンバーの70%がIPLの実施に至っている。欧州におけるIPLは、PDGのメンバー企業が主導しているとみられ、同メンバーの75%がIPLの実施に至っている。（図4）。

また、各国において、IPLの社内におけるステーク

ホルダー、すなわち「IPLの受け手」はどこか、また、IPLをどこまで実施するのか、すなわち「情報可視化の結果を提供する」ととどめるのか、「戦略提案までを提供する」のかについても各国の違いが浮き彫りとなった。（図5）

日本の場合、IPLの受け手は、経営部門・事業部門・R&D部門など広範囲に渡っている。IPLを通じた「情報可視化」は概ね目標を達成済みである一方、IPLを通じた「戦略提案」は目標と現状とのギャップがまだ大きい。

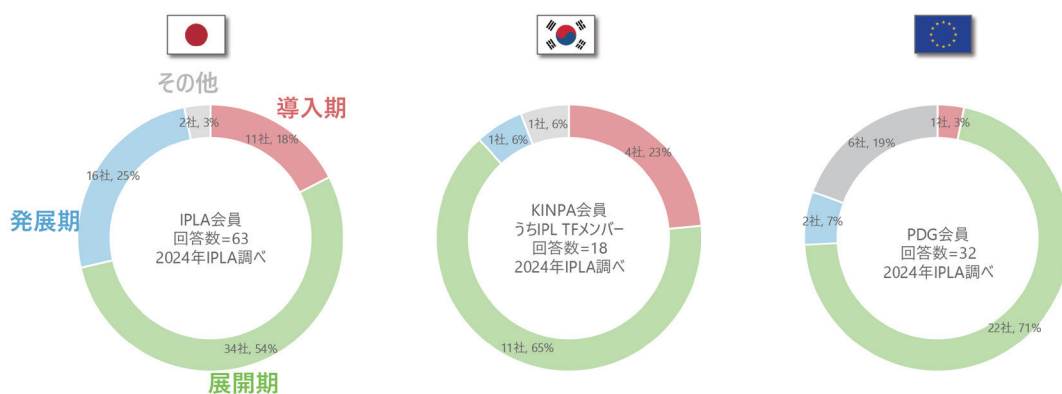
韓国の場合は、IPLの受け手は、経営部門とR&D、マーケティング部門などに比較的フォーカスされている。近年財閥系企業を中心にIPLが立ち上がった同国におい

では、トップダウンで IPL 活動が推進されていることの現れなのかもしれない。現時点では「情報可視化」を目標としている企業が比較的多いが、戦略提案までを目標としている企業が多い日本の IPL に追随する形を取っている様であり、今後日本と同じ動きを迎えることが予想される。欧州の場合は、IPL 活動の受け手は、R&D 部門などに比較集中している。また、圧倒的に「情報可視化」を目標としている企業が多い。欧州 PDG の場合は会員企業がドイツの名だたる大企業であり、社内の組織体制、業務の分業化が影響している可能性がある。

今後は両国と「IPL 遂行における課題と打ち手」について具体的にテーマを決めてディスカッションを行っていく予定である。当然の如く、IPL の遂行における課題は IPL の実施レベルによって異なるものであり、各企業

の IPL の実施ステージを導入期、展開期、発展期と分けて各国毎に整理したものを図6に示す。それぞれのステージの定義は本協議会による IPL の基準に則り定めた。即ち、IPL のゴールを「知財情報等を戦略的に活用し、受け手に対して戦略提案までを行う」と定め、「知財情報の可視化を計画している」フェーズを導入期、「知財情報の可視化を実施」もしくは「知財情報に基づく戦略提案を計画している」フェーズを展開期、「知財情報に基づく戦略提案を実施している」フェーズを発展期とした。

各国の IPL 遂行における課題を整理したものを図7に示した。日本の場合、IPL のゴールを戦略提案までに定めている企業が多いため、それを担っている知財部員の戦略立案、仮説構築、レポート、プレゼンスキルの向上 (N)、知財部員の調査分析スキルの強化 (L) といった



【定義】 導入期：アンケート設問5で③「情報の可視化を計画中」を選択した企業
 展開期：アンケート設問5で①「情報の可視化を実施中」 and/or ④「戦略提案を計画中」を選択した企業
 発展期：アンケート設問5で②「戦略提案を実施中」を選択した企業
 その他：アンケート設問5で⑤「情報可視化/戦略提案を行っておらず、将来的にも予定がない」 and/or ⑦「よくわからない」を選択した企業

図6 IPL 導入・展開・発展期の割合 (日・韓・欧の比較)

- 日本 知財部員の戦略立案、仮説構築、レポート、プレゼンスキルの向上(N)、知財部員の調査分析スキルの強化(L)が比較的多い。
- 韓国 IPL活動の認知(I)や、報告先・提案先の理解(A)に関する課題が比較的多い。
- 欧州 報告先・提案先の理解(A)や、知財部門のリーダーシップの強化(E)に関する課題が比較的多い。

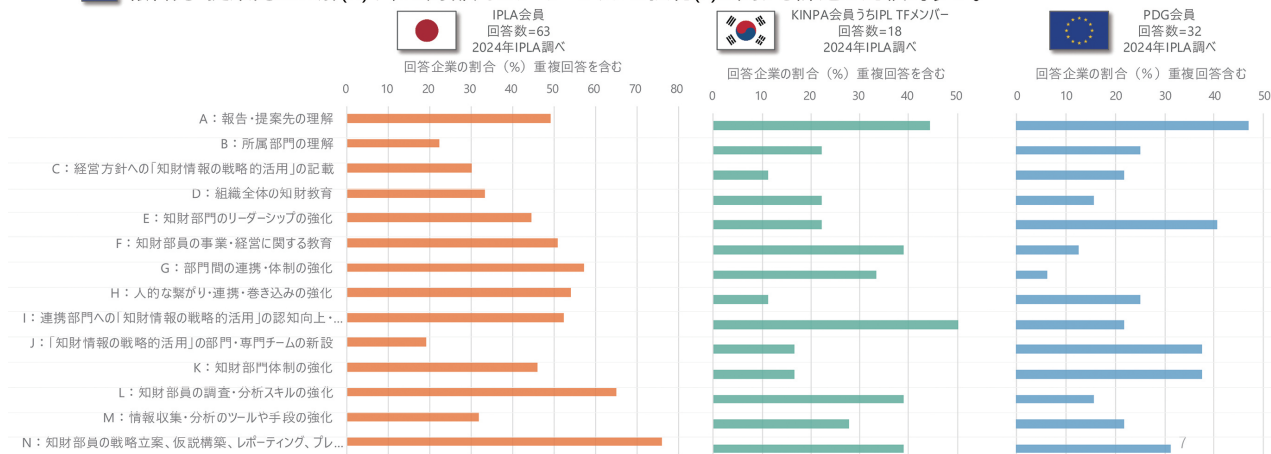


図7 IPL 遂行における課題の全体像 (日・韓・欧)

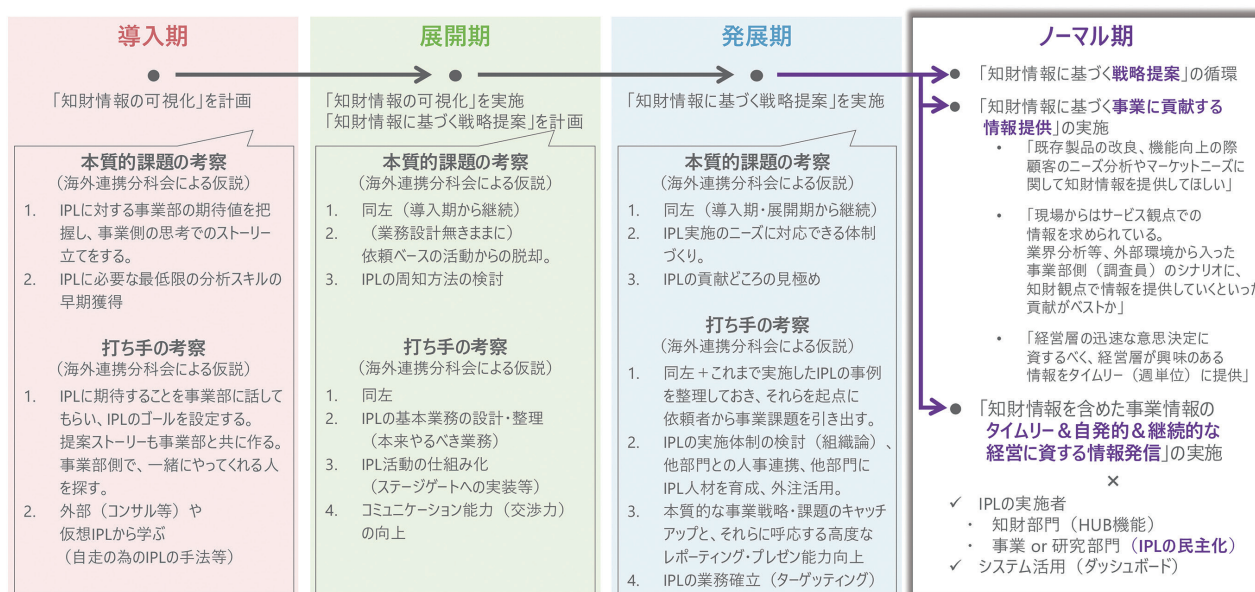


図8 IPL 活動の変遷についての考察：日本の場合

課題が多く出ている。韓国の場合は、IPLの実施期間が短いため、IPL活動自体の認知(I)や、報告先・提案先の理解(A)に関する課題が多い。欧州の場合は、報告先・提案先の理解(A)や、知財部門のリーダーシップの強化(E)に関する課題が比較的多いことが判った。

今後、韓国、欧州と本課題とその打ち手につき議論をしていくにあたり、まずは日本におけるIPLの課題を上述した導入・展開・発展期ごとにまとめたのが図8である。それぞれのフェーズにおけるIPLの本質的課題とその打ち手について明確にした。

「導入期・展開期」では、(やや画一的に)戦略提案を目指したIPL活動が行われる。「発展期」まで来ると、これまでの経験(IPLの成功・失敗)を踏まえて、IPLの自社への貢献どころの見極めが行われる。結果として、自社に貢献できるIPL活動が定着する(自社のスタイルが確立)。これが図で示すノーマル期である。協議会会員企業全体がノーマル期に移行することを目指して、課題と打ち手を海外企業との意見交換を通してブラッシュアップしていくことを本分科会の当面の活動目標に定めた。フェーズ毎にまとめたIPL遂行における課題と打ち手につき、海外から学べる部分をピックアップ(当然こちらから海外にアドバイスできる部分もピックアップ)して、相互の意見交換を行い、議論を通じて得られた知見・打ち手を会員企業に還元を行っていく予定である。(Give & Takeの精神で)

なお、課題については業種やサプライチェーンの位置

づけなどによって異なるものと考えられるため、アンケートの結果を受け、業種毎に選定した会員との意見交換を行い、各ビジネス毎の課題も整理した。

今後はこれらも韓国と欧州に共有化し、両者にとっての共通な課題、独自の課題についてポイントを絞って議論を行っていくことも考えている。両国と会合を持ち議論を進めた結果については今後も本誌等を通して紹介していく予定である。

④ IPL 標準化分科会について

IPL標準化分科会は、仮想IPL分科会で得られた知見やノウハウを形式知化したIPLの標準化を目的としている。仮想IPL分科会で得られた本協議会としての成果を、やりっぱなしではなく、検証入れて標準化するPDCAに乗せ、産業界におけるIPLの普及促進と実践レベルの向上への貢献を意図している。

一企業の知財担当としては、仮想IPLレベルの高さが毎年上がっていくことに正直のところ驚きを禁じ得ない。有志企業どうしが真剣にIPLに取り組んで得られたものは産業界の宝になると感じた。こうした成果を広く産業界に発信し共有拡大していくことの重要性・必要性を痛感し、このIPL標準化分科会は立ち上がった。

仮想IPL活動によって予想を超えるアウトプットが出てきた要因はいくつかある。通常一社でIPLを行うと考えが偏りがちとなるが、本協議会で多種多様な業種

の会社とオープンな議論をすることで、新たな視点を得られる。また、仮想 IPL 分科会では実際に会社内で IPL を実施するのは異なり、失敗が許容され、且つ健全な緊張感の中で自由闊達に議論できて各社の多様性が活かされる貴重な場にもなっている。日本産業界には高品質の商品・サービスを持続的に発展させていく伝統的な強さがある一方、ダイバーシティには弱点があり、業界内での閉じた状態が続いているため、異なる企業や業界の良さを繋げるシナジーが生まれにくい反省がある。これを克服する糸口として、IPL 標準化分科会は機能するのではないかと期待もある。

IPL 標準化分科会の主な活動は、仮想 IPL 分科会の実践で得られた暗黙知を含めた一般解を形式知化し、マニュアルやガイドラインとしてまとめることである。形式知化と共通言語化の推進という観点において、仮想 IPL 分科会の各活動でなされたプロセスを詳細に分析し、成功要因や課題を抽出し、それらを体系的に整理する。これにより IPL のベストプラクティスが明確化され、会員企業間での共通理解が促進される。仮想 IPL 分科会に実際に参加していた際に痛感したのだが、IPL への熱意高く、自ら手を上げて参加してきているメンバーで構成された面々だけあって、議論されるレベルは高く、且つ付度がない。各社それぞれの強み（あえて悪く言えばクセ）が、礼儀をわきまえた中で衝突してスパークする。こうした真剣なぶつかり合いを経てだんだんとベクトルを合わせていくチームワークも学べる場にもなっている。まずは真剣なぶつかり合いから「そういう手があったか…」「やられた…」という気づきを抽出し、「クールに見つめ直して検証する」ことから始めたい。これが標

準化への第一歩となると考えている。（図 9）

協議会での新たな試みである標準化分科会は実際の活動にあたって、PDCA（Plan-Do-Check-Act）サイクルを回すことで、継続的な改善を目指している。実際に 2024 年は 8 社が参加した A/B の 2 チームで第 1 回目の活動を開始し、最初の PDCA を回し始めた。メンバーからの関心が高く、検証分析を入れたいと思う過去仮想 IPL テーマを 2 つ取り上げ、まずは力まないで、これら実例から学べる事は何かを自由にディスカッションする形で検討してみた。A チームでは IPL をわかりやすくし説得力を高める為のポイントに分析を行い、「ネガティブな要素にも触れて、懸念点を解消し信頼性を上げる」「仮設構築の中で取捨選択した考え方・プロセスを見せる」等の重要性が抽出できた。B チームでは実際に IPL している中で出てくる悩みや困りごとが何で、それをどう乗り越えるかについて検討。IPL 対象がスタートアップの場合など特許情報が少なく分析が思うように進まない悩みや、仮設構築してみると分析対象の範囲がこれで良かったのかと悩んでしまうケースなどについて考察を行った。こうして得られた 1 回目の検討の成果を検証し、これらをマニュアルやガイドライン化していく 2 回目以降の PDCA に発展させていく。（図 10）

有志企業の自発自治で生まれた本協議会が、参加企業だけの枠を超えて産業化により貢献をしていく為に、こうした標準化と、その発信は重要な機能になる。それに加えて、IPL 成果を、多様な企業メンバーが集まって、さまざまな観点・感性から見つめ直すコミュニケーション自体が IPL 思考力・実践力の強化にも繋がっているのである。

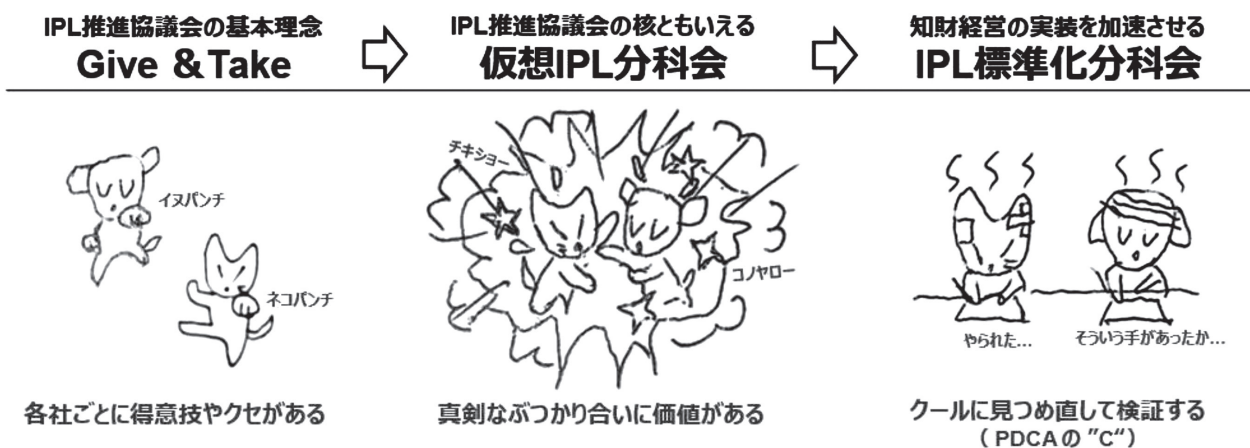


図 9 IPL 標準化分科会の位置付けと狙い

2つの活動から構成 ①仮想IPL分科会の形式知化 ②対外的発信を見据えた成果物作成

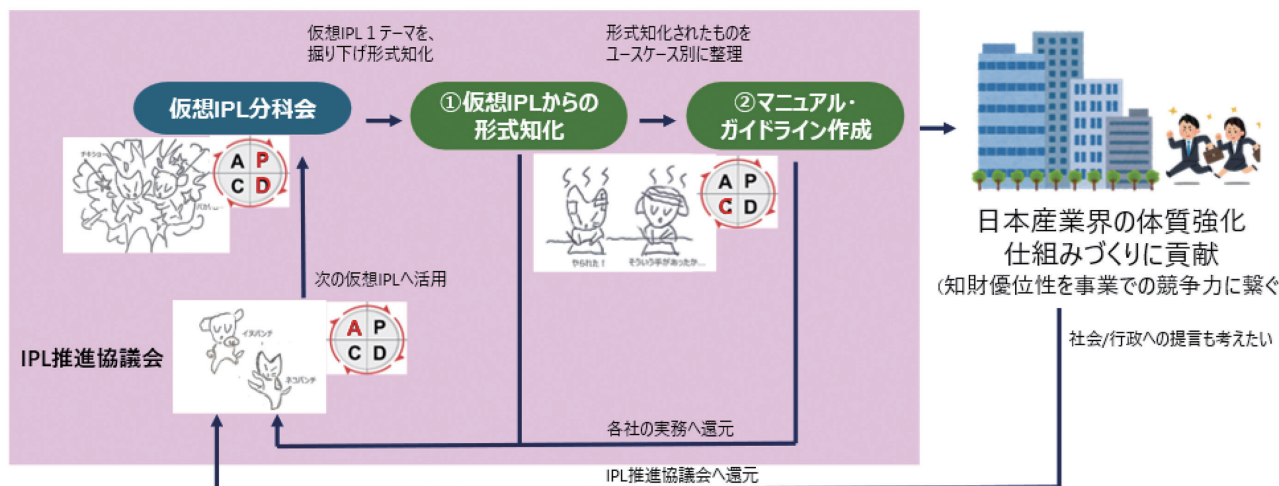


図10 IPL標準化分科会の進め方

⑤ IPL推進協議会4年目の活動総括

本協議会4年目の活動は会員すべての熱意のもと仮想IPL分科会活動、海外連携分科会、及びIPL標準化分科会の各活動がこれまで以上に活発になされ、日本産業界及び学術界が連携できる土壌の形成に着実に近づくことができた。仮想IPL分科会では、今年度も多数の会員が参加し、6チームに分かれて活発な議論がなされた。迫力のあるIPL提案を実施するための近道はなく、様々な参加者と切磋琢磨しながら自身で直接IPLを経験することによって得られる気付きは何よりも大きな財産になったものとする。一方でIPL活動経験の浅い会員企業に対するフォローという点では課題が残った。

IPL標準化分科会では、IPL活動の経験を問わず、IPLが日本産業界を繋ぐ共通言語となるための「仕掛け」として、マニュアルやガイドライン化の取り組みが行われた。特に今年は仮想IPL分科会の過去のテーマについて、主に当該テーマの担当ではなかったメンバーが分析・議論しながら、共通言語化にチャレンジした。この活動は上記課題に対する一つの解となるものと信じている。

そして、海外連携分科会では、欧州や韓国の諸団体を通して各国企業のIPL活動の実態をアンケート調査し、日本を含め各国の課題の共通点と相違点を浮き彫りにした。更にこの調査から得られた気付きより、IPL活動が

各社で当たり前のように実施される状態になるまでの各ステージにおける課題についても検討を進めた。今後、この検討結果に基づく欧州や韓国の諸団体との議論を通して、グローバルレベルでの社会的利益の最大化を図るとともに、本協議会のプレゼンスが更に高められるものと考えている。

⑥ おわりに～本協議会今後のビジョン

本協議会は、発足から5年目を迎え、単なる企業間の情報共有や勉強会といった枠組みを超え、着実に活動の幅を広げ、深化させてきた。会員各社の熱意と協力のもと、仮想IPL分科会、海外連携分科会、IPL標準化分科会の3つの分科会を中心に活動を展開し、目覚ましい成果を上げていることは既にご紹介した通りである。

中核となる仮想IPL分科会では、会員が企業課題に対し仮想的にIPL活動を行う実践の場として、スキル向上と暗黙知の共有を促進し、新たな視点や発想を育む。その実践的な活動は、参加者にとってかけがえのない経験となり、各社の知財戦略を推進する上で大きな財産となっている。

海外連携分科会では、グローバルなIPL課題と可能性を探求し、各国企業の実態調査から得られた知見をもとに、グローバルレベルでの社会的利益の最大化を目指

し、本協議会のプレゼンスを更に高めていく。

IPL 標準化分科会では、仮想 IPL で培われた知見を形式知へと昇華させ、IPL の普及と実践の質向上に寄与する。特に、過去の仮想 IPL テーマを新たな視点から分析し、共通言語化を試みることで、経験の浅い会員企業が IPL に取り組みやすくなるような道筋を示すことを目指す。

今後は、これらの活動を更に発展させ、会員企業の連携を強化するとともに、国との連携も視野に入れ、大学、中小企業、スタートアップなど多様な主体との相互理解を深める接点を積極的に創出することで、IPL の裾野を広げていきたいと考えている。

また、多様な意識やレベルの会員すべてが相互に研鑽し成長できる場を提供することで、IPL を産業界を繋ぐ共通言語として普及させ、日本産業界全体のレベルアップに貢献できる、活発で持続可能なコミュニティを形成していきたいと考えている。

本協議会は、設立当初からの理念である「Give & Take」の精神を大切にしながら、今後も IPL の普及と深化に邁進し、個々の企業価値向上のみならず、知財をコアとした企業間連携を促進し、日本産業界の活性化に貢献することを目指していく。

7 注記

- [1] Japio YEAR BOOK 2021 企業活動における IP ランドスケープ
https://www.Japio.or.jp/00yearbook/files/2021book/21_2_04.pdf
- [2] IP ジャーナル第 18 号「企業活動における IP ランドスケープ～IP ランドスケープ推進協議会の活動～」
<http://fdn-ip.or.jp/ipjournal/vol.18.php>
- [3] IP ジャーナル第 21 号「企業価値創造へ向けて知財をどう活用するか！ パネルディスカッション『企業価値(コア価値)を支える IP ランドスケープ』」
<http://fdn-ip.or.jp/ipjournal/vol.21.php>
- [4] IP ジャーナル第 24 号「IP ランドスケープ推進協議会 活動第 2 フェーズにかかる期待 ～9 つの仮想 IPL から見えてくるもの～」
<http://fdn-ip.or.jp/ipjournal/vol.24.php>
- [5] グローバル知財戦略フォーラム 2021 「IP ランドスケープの新潮流から『IPL 推進協議会』の設立と活動」

https://www.inpit.go.jp/katsuyo/gippd/forumkokunai/forum_kokunai2021.pdf

- [6] 2021 特許・情報フェア&コンファレンス「企業価値創造へ向けて知財をどう活用するか！～企業価値(コア価値)を支える IP ランドスケープ」
<https://pifc.jp/2021/visit/>
- [7] 2022 特許・情報フェア&コンファレンス「IP ランドスケープ推進協議会 活動第 2 フェーズにかかる期待 ～9 つの仮想 IPL から見えてくるもの～」
<https://pifc.jp/2022/visit/>
- [8] 知財研セミナー「IP ランドスケープ推進協議会の活動と会員企業における取組」
<https://www.iip.or.jp/seminar/seminar211020.html>
- [9] Japio YEAR BOOK 2023 「IP ランドスケープで「つなげる」「つながる」ーIP ランドスケープ推進協議会の仮想 IPL の取り組みー」
https://Japio.or.jp/00yearbook/files/2023book/23_3_04.pdf
- [10] IP ジャーナル第 28 号「IP ランドスケープ推進協議会 活動第 3 フェーズにかかる期待～仮想 IPL と海外連携～」
<http://fdn-ip.or.jp/ipjournal/vol.28.php>
- [11] 2023 特許・情報フェア&コンファレンス「活動第 3 期目に入った IP ランドスケープ推進協議会 経営と IPL の課題 ～活動の実践とその成果～」
<https://pifc.jp/2023/visit/>
- [12] Japio YEAR BOOK 2024 「IP ランドスケープで「つなげる」「つながる」ーIP ランドスケープ推進協議会の取り組み紹介ー」
https://Japio.or.jp/00yearbook/files/2024book/24_3_04.pdf
- [13] IP ジャーナル第 32 号「新たな活動ステップに入った IP ランドスケープ推進協議会 “日本産業界の強化” に向け当会が果たしたい役割とは !?」
<http://fdn-ip.or.jp/ipjournal/vol.32.php>
- [14] 2024 特許・情報フェア&コンファレンス新たな活動ステップに入った IP ランドスケープ推進協議会 “日本産業界の強化” に向け当会が果たしたい役割

とは!?

<https://pifc.jp/2024/visit/>

[15] Patent Documentation Group

<https://www.p-d-g.org/>

[16] Korean Intellectual Property Association
(KINPA)

<https://www.kinpa.or.kr/>

[17] 経営戦略に資する知財情報分析・活用に関する調
査研究

[https://www.jpo.go.jp/support/general/
chizai-jobobunseki-report.html](https://www.jpo.go.jp/support/general/chizai-jobobunseki-report.html)